

イマーゼンシー

大津 隆文

今から五十年ほど前ニューヨークに駐在勤務したことがあった。不慣れな環境で苦
労もあつたが、夏休みに家族で一週間程のドライブ旅行が出来たのは楽しかった。時に
はほろ苦い思い出だ。

あれはナイヤガラ方面に向かつていた時だったか、走行中に息子が「おしっこがし
たい」と言い出した。やっと休憩所に辿り着きトイレに駆け込んだが、予想外に長い
列、息子は足踏みしたり身を振ったりしていたが、「もう少しだから我慢して」と言
っている間に、とうとう漏らし始めてしまった。トイレの片隅に行つて後始末をして
いると、近付いてきたアメリカ人が「どういう時は emergency と叫ぶといいよ、きつと
譲ってくれるよ」と教えてくれた。emergency というのはもつと深刻、重大な事態を言
うのかと思っていたが、意外に身近でも使うのだと知った。

後日駐在員仲間の知人からは「自分は車の中に小さなバケツを置いているよ」との助
言を貰つたりもした。

幸いその後はイマーゼンシーに直面することはなく言葉も忘れかけていたが、最
近になって我が身の直接的な問題として復活した。

まずは数年前高尾山によく通っていた頃だ。麓のトイレで用を足して歩き始め大体
二時間位で別なトイレに辿り着くのだが、コースによってはトイレのないこともある。
我慢する力が衰えたためかイマーゼンシーとなる。大自然の中での立ち小便是本当
に爽快だが、昔と違い今や罪悪感を伴う世の中だ。前後の人影が気になって全く落ち
着かない。

やむなく泌尿器科へ行ったら「ベオーバ」という薬を出してくれた。何でも膀胱を膨
らませてくれるらしい。早速使ってみたが、気休めにはなつたものの期待したほどの
神通力はなかった。

その後高尾山は縁遠くになったが、近頃は外でも家でも油断するとイマーゼンシー
に陥る情けない老体になった。再度泌尿器科へ行くと処方してくれたのが同じ薬。薬
局へ行くと顔なじみの薬剤師さんが「あら、また高尾山に行かれるんですね」と明るく
声を掛けてくれた。